

# 50万分の1活構造図「京都」(第2版)の出版

水野清秀<sup>1)</sup>・寒川 旭<sup>1)</sup>・関口春子<sup>1)</sup>・駒澤正夫<sup>2)</sup>・杉山雄一<sup>1)</sup>・吉岡敏和<sup>1)</sup>・佐竹健治<sup>1)</sup>  
荻谷愛彦<sup>3)</sup>・栗本史雄<sup>2)</sup>・吾妻 崇<sup>1)</sup>・須貝俊彦<sup>4)</sup>・栗田泰夫<sup>1)</sup>・大井田徹<sup>5)</sup>・片尾 浩<sup>6)</sup>  
中村正夫<sup>7)</sup>・森尻理恵<sup>2)</sup>・広島俊男<sup>2)</sup>・村田泰章<sup>2)</sup>・牧野雅彦<sup>8)</sup>・名和一成<sup>2)</sup>

## はじめに

地質調査総合センターでは、全国の50万分の1活構造図シリーズを出版しておりますが、このたび「東京」に続いて「京都」の第2版を出版いたしました。地図の範囲は近畿圏の大部分と中京圏が主体になります。

1995年に発生した兵庫県南部地震以降、直下型地震の原因となる活断層の危険度評価を行うことが急務となり、近畿圏をはじめとして全国で活断層や地下構造についての調査が精力的に行われるようになりました。その結果、陸上の活断層の活動履歴、平野下や海底下などに伏在する活断層の分布と活動性、さらには地下深部の地質や地盤特性、地震、重力などに関する大量の新しい情報が提供されつつあります。第2版では、このような膨大な資料を基に活構造図を大幅に改訂しました。

## 活構造図の構成

活構造図「京都」(第2版)は、活断層や新しい時代の地質の分布を中心に示した「活構造図(本図)」に加えて、歴史地震の強震動域、古地震跡の分布、その地震を引き起こした活断層などを対応させて示した「古地震データ図」、歴史地震・微小地震の分布、フィリピン海プレート上面の等深線などを示した「地震構造図」と、地下の密度構造を反映するブーゲー異常の等重力線及び重力基盤高度

を示した「重力構造図」の計4枚の図からなります。どの図も、活構造の分布と重ねて表現してあります。詳しくは口絵に示したそれぞれの図と説明をご覧ください。

## 図の重ね合わせ

活断層はどの地域にも均等に分布しているわけではなく、ある特定の地域に集中していたり、特定の方向に並んでいたりすることが活構造図からわかります。また「重力構造図」をみると多くの活断層が盆地と山地の境界付近にあり、断層運動によってこれらの地形が形成されてきているように思えてきます。さらに活断層と古い時代に主に活動した断層の分布の違いや、盆地を埋積した地層の分布域が時代と共に移動していく様子を、「活構造図(本図)」から読みとることもできます。一方、「地震構造図」や「古地震データ図」を見ると、地震がどのようなところで起こり、活断層やプレートの沈み込みとどのように関係しているかが見えてきます。また「古地震データ図」では地震の被害の範囲が、どの程度に及ぶのか、イメージしやすくなると思います。このように4枚の図を組み合わせることで、数百万年のオーダーから数分のオーダーまでの地殻変動・地震活動についてイメージを膨らませることができるでしょう。(文責:水野清秀)

1) 産総研 活断層研究センター  
2) 産総研 地球科学情報研究部門  
3) 千葉大学大学院  
4) 東京大学大学院  
5) 名古屋大学大学院  
6) 京都大学 防災研究所  
7) 元東京大学 地震研究所  
8) 産総研 深部地質環境研究センター

キーワード: 活構造図, 活断層, 古地震, 地震, 重力, 近畿, 東海, 断層活動, 兵庫県南部地震, 強震動, 地震跡, フィリピン海プレート, ブーゲー異常